

授業法について

今回のアンケートで高い評価を得たことについては、平成14年度工学部ドイツ語7組のみなさんにまず感謝したい。彼らと私の協同作業である授業が（少なくとも一定程度）成功した結果だからである。

私たちはドイツ語を「コミュニケーションのための手段」、並びに「ドイツ語圏・中欧への扉を開く鍵」と位置づけ、学生のみなさんが「聞く・話す・読む・書く」4技能の基礎をしっかりと身につける授業を目指している。同時にドイツ語によるコミュニケーションの文化的要素についての学習も行うことをシラバスに明示している。「教師により教え方がちがうのにシラバスはみな同じでわかりづらい」という批判をたまに受けるが、語学教育のコンセプトに関しては様々な立場があり（「コミュニケーションメソッド」、「異文化コミュニケーション」、「教養としての語学」など）、シラバスの記述は基本線である。

以前の私は、文法規則を先に教えて読解を中心とする技能の展開に進むという方法をとっていた。学生のみなさんが経験した「受験英語」もほぼこの範疇に入る。しかしある学生から「ヒトラー」と呼ばれて以来それがトラウマとなり、教え方の工夫には今ももがいている。文法中心の方法には優れた点が多々あるが、どうしても規則が先に立つので、会話の際口が重くなる傾向は避けがたい。また私たちが分析した学生の作文を見ると、個々の「句」や「文」のレベルでは比較的正確な表現ができて、「文章」としてなかなかまとまらないという面もある。

受容だけでなく発信する能力も身につけさせるのであれば、頭の中に「ドイツ語モード」を築いて耳と口をドイツ語に晒すのが近道であると今の私は考えている。そこでどのクラスも最初の授業を「私ハ寺田龍男トイマス。アナタハ何トイウ名前デスカ」とドイツ語で全員に話しかけることから始めるが、ふつうの人はこの方法に当惑する。受験秀才ほど戸惑いは大きいかもしれない。しかし躊躇いながらも教師をまねて発音すれば、もうりっぱなドイツ語である。それをポジティブに評価し、身振り手振りで相手に伝え、不安は見る間に解消する。このようにドイツ語のみを用いる時間を設け、ペア練習を通して表現を頭にインプットし、そのあとで文法規則を説明するというのが現在の私の方法である。また教科書はドイツの出版社のもので日本語の説明がない。そのため手作りの補助教材を配布するが、毎回実施する「習熟度チェック」の結果や学生の質問・意見に対する回答をそのつど取り入れることで、学習内容の理解や動機づけも促進できる。また紙の上の知識だけでなく生きた技能が身につくことを目標とするので、頻繁に指名し、かつ質問する機会もできるだけ設けている。クラスにより「活発」「控えめ」といった傾向はあるが、それぞれの個性に対応しつつ、インタラクションの度合いを高めることは取り組みがいのある課題である。

なお平成15年度のクラスでは授業アンケートの評価が下がっており、その数値には有意の差がある。同じ教科書と問題集、そして改良した補助教材を用いたにもかかわらずこの結果では、私の方法には改善しなければならない点が多々あるといわなければならない。来年度はさらに工夫してぜひ授業を成功させたいと願っている。